

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
月を かけろう	順一	楽 たか子	佳蓮 ひろ志		マスミ はるみ	凡士 拓司	薫風			椿	朝香		拓真 くるみ	あき 秀子
新緑と汽笛映してみずかがみ <small>清々しい景です。汽笛を映すという表現がうまい。</small>	入山を愛づる若葉や靴の紐	夕立を帰り来し子の頭拭く <small>夕立に遭い帰ってくる我が子を思い出しました。頭を拭いているのは母親であろう。母親の愛情がうまく表現されている。</small>	葉桜を見上ぐ女の泣きぼくろ <small>艶っぽいですね。泣きぼくろの女性。桜若葉を愛でるとともに、桜花の急ぎ散つたのを惜しんでいる。</small>	句作する隣にマラソンの裸	大楠の亭々として宮若葉 <small>楠木は人里近くで見かけるが、大きくなるものが多い。寺や神社の森では大木が見られる。「亭々として」に威厳が読み取れる。</small>	夏蜜柑わいわいがやがやジャムにする <small>楽しそうなジャムづくり、但し中八は駄目。オノマトペとジャムがマッチして高効果でした。</small>	産土の一社を蔽ふ楠若葉 <small>楠の大樹が想像される。</small>	男より女澆刺風五月	おもだるき午睡の耳に初夏の風	風光る観光バスのクラクション <small>風光るがいいですねクラクションは想像が広がります。</small>	新茶の芽風にゆれては香をこぼす <small>爽やかな季節感に溢れ、中七、下五の措辞が秀逸。</small>	住宅地遠慮がちに鶯の鳴く	横たわるでっかい牛だ春なんだ <small>素直な口語体に惹かれた。素朴で好感の持てる句、これぞ春！！中7下5の「だ」のリフレインが心地よいです。</small>	全身が動詞のごとくうごく初夏 <small>動詞・うまい言葉を見つけましたねー！。動詞のごとくという表現が初夏にぴつたりです。</small>
山川充	青木鶴城	風信子	新井のり子	吉川拓真	松田素風	森佳蓮	破れ蓮	西村青夏	井上昌湖	檜鼻ことは	小野町子	明陶家	太田怒忘	松岡拓司

水明インターネット句会（選句・選評） 令和五月

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五月
	忘蓮 怒佳 六弦	楽 薫風			のり子 山菜 きいち		暦文 ことは あらか 風子		ひろ志 孤舟	俳翁		小麦 たか子	のり子 みづる	素風 俳翁	
夏つばめ町家格子の虫籠窓	他愛なき嘘聞いてやる蛇苺 おもしろいと思いましたが。「他愛なき嘘」ってどんな嘘だろうかと思 いました。季語の選択が良いと思います。	粉黛の稚児を乗せたる山車囃子 我が子への愛情のわかるいい句だと思いました。「粉黛」の措辞が巧 みである。	ダービー馬鼻の差で勝ち息荒らし	爪楊枝啣へ狭客ぶる薄暑	軽トラの助手席に犬 麦の秋 見覚えのある光景が上手く切り取られている。なんと言うことはない がおもしろい！年寄のお相手は犬なんです、ちよつとだけ淋しいで すね。	どの牛も木陰に籠る炎暑かな	初鯉駅出たあたり出刃を研ぐ 初鯉で一杯待ち遠しいですね。到着が待ち遠しいことですね。初鯉を お取り寄せしたのだから料理者のわくわく感が伝わってきました。初 鯉が家に着くのが待ちきれない、その逸る心が良い。	黄薔薇咲くヘンリー・フォンダと名乗りけり	能登の香も届けて鱧の一夜干し キスの一夜干し。能登の話題にひとしきり。市場が思い浮かぶ。	古き薔残りしままに柿若葉 古き薔残りしままに柿若葉。	長閑とは縁でぼけっとしてる刻	病む父の膳に小さき柏餅 小さくとも、季節のものを食べさせてあげたいという優しさが沁みま した。お父上様の大好きな柏餅をご用意され嘸かしおいしくめしま がったご様子が目にうかびます。一日も早いご回復をお祈りいたしま す。	春尽やドレスのようになつっじ落つ 父を思う気持ち伝わる。華やかな花の落ちた様は正にこの通りで す。	小夜荒れて常盤木落葉宮に敷く 「宮に敷く」が良い。一夜明けたお宮の夏落葉の様子が見てとれる。	
しんい	荒一葉	安田蝸牛	俳翁	網野月を	くるみ	邦治	ひろ志	森下山菜	河野凡士	幸子	衛	新暦文	雪待月田猫	薫風	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五月
一葉		幹子 はるみ			しんい	猫朝香 かげろう	京子 たか子		山菜 六弦	マスキ きいち	京子	町子	拓司	ゆりあ	
僻村に夕餉の煙薄暑かな <small>少子高齢化の村では民の夕餉の煙も少なくなつたが、季節は確かに初夏である。季語が的確</small>	夏立ちぬ妻負け帰り皆やさし	若葉風おさなの産毛光りをり <small>幼子の産毛に焦点をあてて詠まれているのが見事。若葉風と産毛の光りをりが生き生きと明るい未来が見えてくる様です。</small>	燃え盛る炎のごとし西の空	葉桜や永遠の御燈明奥の院	ゆつくりと亀のクローラ花筏 <small>クローラに納得、面白い</small>	連休や庭の青葉とカフェオレと <small>コーヒー好きとしては共感しかありません！至福の連休だったようで、何よりです。ゴールデンウイークを庭を愛でながら珈琲を楽しむ、素晴らしい。まったりと過ごす家での連休もまたよし。</small>	菜の花や光滔々千曲川 <small>「光滔々」が良い。「滔滔」に。菜の花畑の中を陽光を浴びて千曲川が滔々と流れている。雄大な景観が眼前に浮ぶ。</small>	赤城山麓街の際まで麦の秋	ほうたるや何れそのうち俱会一処 <small>ホテルともそのうち冥途で一緒とは、うんうん。中七に人生の壮大なスケールを感じます。</small>	竹林の雀こぼすや青嵐 <small>雀は用心深い鳥でちよつとした気配にも敏感に反応する。竹林にいた雀たちが折からの青嵐にパラバラと逃げ出した。「小雀こぼす」の表現が良い。雀こぼすが面白い。</small>	卒寿への道遠からず白菖蒲 <small>卒寿の次は白寿です。ますます御健吟を。</small>	へびの殻遠まきにして園児帽 <small>怖いもの見たさの園児の様子が浮かんでくる。</small>	砂山のやまに腰かけ夕薄暑 <small>あえて「やま」と入れた狙いは？謎の魅力があります。</small>	乳母車薫風蹴り上ぐ足せはし <small>光景が目に浮かびます。</small>	
龍野ひろし	孤舟	朝香	あき	丸山マスキ	ありぎりす	いさむ	和田イチ子	渋谷きいち	光雲2	本橋稀香	後藤允孝	小林土璃	しーしー	みづる	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
秀子					凡士		ひろ志 絵夢			ありぎりす		きいち		
ラ・カンパネラ調べに酔いて夏の星 <small>最近亡くなったフジコヘミングへの追悼句にふさわしい。</small>	遮断機や逸る足元蜥蜴俟つ	三桮の花咲く古墳日は西に	夏の露朝日を浴びて乱反射	浅草の夜を闊歩する祭りあと	ゴールデンウィーク吾子と熱の床 <small>コロナか！私も同類で親近感沸く黄金週間。</small>	血より濃き赤き紅差し夏に入る	ねむる児に波の残せしさくら貝 <small>「さくら貝の唄」を子守歌に、波を夢見ながら眠る児。元気に育ちます。地球の奏でる子守歌が聞こえてきそう。</small>	春浅し轍の硬き異郷かな	夏めくやブラウス光る女学生	風五月どの子の頭も撫でて行き <small>やさしい句。ホツとしました。</small>	蟻地獄カーナビ効かぬ首都の道	ミスターの勝つ勝つ勝つ薄暑かな <small>何しろ巨人軍には勝って欲しい。</small>	よろこびをしきりにこぼす四十雀	青空やみどりに乾く若布なり
佐藤幹子	絵夢	小林京子	日高道を	椿	横井あらか	木村小麦	ゆりあ	伯男	反町修	霜里	総太郎	平野楽	石関六弦	岡本たか子

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
拓真		怒忘 あらか 月を 風子 鶴城		絵夢	蝸牛			土璃 くるみ		あき 喜夫 はるみ			暦文 しーしー 順一	佳蓮 しんい あき 小麦香 稀鶴城
老鶯のしきりに鳴くや父母の墓 激しく鳴く鶯は悲しみか、励ましか。	雨一過雲居を渡る風は初夏	メモに無きアスパラガスの束ふたつ リズムと音がとても心地よく、明るい情景が浮かびます。旬のアスパラの衝動買いに共感を覚えました。買い過ぎました。スーパーで美味しそうなアスパラを発見、季節感が出ている。	老母の寢息薄暑の昼下がりに	桜咲く自撮り写真のシワ修正 一緒に写っている桜が「ずるい」と怒っています。	端午かな三頭身の金太郎 ユーマラスな一句だが、これが俳句の本質かも・・・。	ランタンとラッタッタツと夢旅行	行く春にぐわっと伸びた牛の舌	燕来る積み木のやうな記念館 シンプルさが良いです。	てんと虫フロントガラスで斜め向き	らっぱ飲み太宰の知らぬ缶ビール 太宰と缶ビールの写真が見たかったな。新しいビールを太宰に飲ませたい、アル中にならず長生きし、違う作品ができたかも？ラツパ飲みがきいてます。缶ビール太宰も見てますよ！	カラオケはいつもデュツトニ輪草	三社祭宮出しの声高らかに	街道に一里塚たる桐の花 旅人も桐の花の下で一休み。郊外にポツンと立つ桐に咲く花。	行く春や妻の小言を消し壺に 消し壺の幹旋が見事。消壺に入れた小言が燃え上がらないといいますが。消壺に入れられて終了させられる妻としてはやや不満ですが、その程度の小言だったのでしょうか。俳諧味のきいた楽しい句です。
西村青夏	破れ蓮	檜鼻ことは	井上昌湖	明陶家	小野町子	松岡拓司	太田怒忘	佐藤蓮花	石川順一	羽島秀子	染谷風子	かげろう	河野はるみ	持永喜夫

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
	素風 孤舟 伯男 土璃 マスミ 風子 允孝 稀香 鶴城 曆文 みつる ひろし 霜里 ありぎりす 絵夢 くるみ あらか	風信子 霜里				允孝 蝸牛 修		蝸牛				土璃 破れ蓮		允孝 破れ蓮 ゆりあ
朝焼を背に帰り来る漁船団	子燕のことも日誌に駐在所 が平和なのも駐在所のお陰です。 ける家は安心と言いますね。日常の些事を描き、安寧の大切な光景、村 小燕の成長の様子を書き留める優しい駐在さんの人柄が、四季の変化に す。心なびた駐在所の雰囲気だろ。この駐在さんは、四季の變化に 巡りさん。昭和です。お巡りさんのお顔が目に浮かびま す。ひなびた駐在所の雰囲気だろ。この駐在さんは、四季の變化に も関心を持つ豊かな人なのだろう。駐在さんの人柄が、四季の變化に 小燕の成長の様子を書き留める優しい駐在さんの人柄が、四季の變化に ける家は安心と言いますね。日常の些事を描き、安寧の大切な光景、村 が平和なのも駐在所のお陰です。	馬鈴薯の花摘み母は元気です 元気ですの一言がうれしい。	鷺草をこよなく愛でし妹の影	藤の花フェンス代りに仕立てられ	風薫る一途に入るホームラン	瓦礫の山能登に希望の鯉のぼり 能登地方を襲った地震により生活もままならない光景に、鯉のぼりが 一光を与えてくれました。復興の願いがダブる。瓦礫の山の中の鯉幟 は能登復興の希望の光。	植林せし彼の山や今かかり藤	回廊を巡りて愛づる牡丹寺 嘗て訪れた奈良の長谷寺が想われた。	牛の子の木陰に伏せる暑さかな	肩書きを失くせし肩身袋角	夏草に人の消えれば暗きかな	朝蝉の声近くなる持仏堂 「声近くなる」という措辞が効果的である。	妻逝きて半年の過ぎ青時雨	薔薇の香に棘有ることを忘れをり 咲き誇った薔薇に棘あることも忘れれるほど奇麗だったのでしょうか。実 感句だと感じた。同じ気持ちです。
邦治	河野凡士	森下山菜	衛	幸子	雪待月田猫	新曆文	山川充	薫風	風信子	青木鶴城	吉川拓真	新井のり子	森佳蓮	松田素風

水明インターネット句会（選句・選評） 令和五月

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	
		風信子 一葉	伯男	稀香	素風	怒忘 ことは 田猫 破れ蓮 しーしー		のり子 町子	ひろし ことは 俳翁 田猫 喜夫 ゆりあ		朝香	幹子 順一	拓司		
麦秋や燃えて黄金に噎せ返る	荒畑や一面に一斉に土筆	夏めくや大道芸のジャグリング 空に舞うジャグリングのピンの軽さに感じ取れた夏の香り、季語が効いている	若葉揺れひと日耀く風の駅 長閑ですな。	枯池に迷い蜥蜴の薄暑かな	重い荷を背負った歩荷を励ますよう咲く水芭蕉の景が鮮やかです。	さみどりの光あまねく若楓 初夏が爽やかに表現されている。	白杖の音透き通り青葉風	飛び石の木立のなかに黄の薔薇ぽ	群れずひとり急がずゆるりかたつむり かくありたき一句。上五中七対句になり、末尾がりて終わっている。	艶やかに波打つ薨走り梅雨 雨をうける薨の何と美しいことでしょう。瓦を濡らす雨に艶やかさを覚える梅雨の一コマ。詩的な美しさと、デッサン力に溢れた句。「艶やかに波打つ」が雨の姿を写実的に映像化し、体言止めが「雨」に存在感を与えています。唐風の薨は優美で、雨に濡れた風情は艶っぽさが書かれており素敵です。薨が喜んでいるようです。	スターバックスの外は満席風五月	漫ろ来て匂ふ卯の花月夜かな 初夏の夜の美しさを詠んだ心に染みる句です。	白ぼたん 崩るる時の水の音 清楚で華やかな大輪の牡丹が目には浮かびました。崩れる瞬間水の音がしたと言いつてるのが素晴らしい。	廃船のマストが今も起つてゐる シンプルななか人智を越える物理が現れています。	ジーンズをずらして履くも薄暑かな
渋谷きいち	和田イチ子	本橋稀香	光雲2	小林土璃	後藤允孝	みづる	しーしー	荒一葉	しんい	俳翁	安田蝸牛	くるみ	網野月を	ひろ志	

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106
楽	風信子			凡士		京子	椿			修 伯男	ひろし しんい 薫風 しーしー		喜夫 椿 月を 六弦	孤舟
願掛けの絵馬に礼書き夏の宮 願いがかなったのですね。礼を忘れないところがいいですね。	この目高今や絶滅危惧種とは 目高が絶滅危惧種であるとは知りませんでした。調べると確かに絶滅危惧種でした。学校の池などで見かける目高も今や絶滅危惧種。その事実を知らない人にとって印象的な句です。	春の色そつと蕾にまとひゆき	残雪の縦縞模様初夏の富士	豆飯の炊き上がる香の青々と 青々が利いていかにもうまそう。	迷ひなく涼風に引く丁定規	紫陽花や誰とも縁を切らずとも 季語が効いている。	初夏や肌透くごとき有田焼 初夏の旅に有田焼を見つけたのでしようか作者の見つめる視線に解放感が感じられます。	碇泊の影の黒々夏来たる	八十路超えし三姉妹寄り豆御飯	初夏迎え風鈴吊るし風を聞く 歩荷と水芭蕉の取合せが秀逸。「風を聞く」で暑さや和らぐかな。	歩荷の歩一歩一歩や水芭蕉 尾瀬でしようか、歩のリフレインがいい。尾瀬が想い浮かぶ。歩・歩・歩とリズムミカルな歩み。	窓越しに燃ゆる夕日の懐かしく	表札の一文字薄れ初燕 老夫婦の家に初孫が授かったほつとした喜びが初燕に込められているみたいでいいですね！表札と来ると懐かしく初燕で一気に希望がもてます。古くなつた我が家に今年も幸せが届きました。	皆がリズムに乗っている様子が浮かぶ。旧家なんですね。 トイレ待つ列のタップやジャズフェスタ
木村小麦	反町修	伯男	総太郎	霜里	石関六弦	平野楽	龍野ひろし	岡本たか子	朝香	孤舟	丸山マシミ	あき	いさむ	ありぎりす

	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121
		一葉 修 かげろう 町子	拓真		霜里	ありぎり す						山菜	小麦 秀子 幹子	みづる
	風呂敷をマントに走る風5月	昭和の日椅子の背硬き夜汽車かな	夜気涼し丁度六百歩で帰る <small>椅子の背の硬い夜汽車は昭和へのノスタルジー、思い出させて旅に出る。昭和の日の懐かしい回想。昭和の夜行列車には寝台ではない椅子席もありました。昭和の時代の汽車の風景を思い出した。</small>	夕立晴みちばたの草生き生きと <small>涼しさゆえの万歩計遊びが楽しい。</small>	母の日に届く宅配養命酒 <small>離れていても思い遣り。</small>	手に溢れ吾子のゆばりのあたたかさ <small>わが子、わが孫なればこそ、です。ね。</small>	追ひ掛くる巧みな捌きあめんぼう	風かおる笑みに生きたし菩薩のやう	古里は遠くなりゆく松の芯	夏の海光と影の半世紀	婚礼の日の近づきぬ山百合咲く	でかい顔せる蒲公英や野の午餐 <small>たんぼぼのでかい顔には驚いた</small>	明易し兄の声して兄逝けり <small>お兄様がお別れに来てくれたのです。ね。きつと仲の良いご兄弟だったの。で。し。よ。う。兄上へのお気持ちがよく伝わります。明易しの季語が動きません。お兄様を亡くされたのでしようか。お辛いですよね。私も2年前に同じような経験をしました。</small>	空色の帽子の夏のはじまりぬ <small>いつものこの帽子が登場すると、もう夏。今年はどうな夏になるのだろうか。</small>
	佐藤蓮花	羽島秀子	石川順一	かげろう	染谷風子	持永喜夫	河野はるみ	絵夢	佐藤幹子	日高道を	小林京子	横井あらか	椿	ゆりあ